

I-I 和歌にみる日本人の宗教心

著者	ロータモンド ハルトムート オ
雑誌名	日本文化と宗教 宗教と世俗化
巻	8
ページ	3-11
発行年	1996-03-29
その他のタイトル	I-I Waka ni miru Nihonjin no shukyoshin
URL	http://doi.org/10.15055/00003199

I—I
和歌にみる日本人の宗教心

ハルトムート・オ・ロータモンド

日本宗教史や宗教思想に興味ある者にとって、「山」が日本精神文化のなかで重要な位置を占めるということはすぐに明らかになるであろう。

山岳信仰はもちろん世界中の普遍的な現象なのであるが、日本ではそれが特に目立つものとなった。古代神道にしても、仏教（特に密教）にしても、神仏習合思想の代表である修験道にしても、「山」は思想・教理・儀礼のうえで大変重要な役割を演じている。山に関する思想は忌言葉あるいは山言葉のうえにも現れている。それだけではなく昔話や伝説をとおして、いやむしろ詩歌や諺などにこそもっともよく表現されていると思う。

「ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなりけるやまとうた」と古今集の有名な序にすでに定義がある、いわゆる和歌には、山への心情もいろいろな形で現れている。それを検討するため、以下、伝統的な和歌——つまり諸歌集からの——だけではなく、修験道の秘歌や広い意味での呪歌をも引用することにする。場合によって歌謡や諺なども例とする事もある。

山の定義を辞書で探してみてもたいした答は返ってこない。例えば「平地よりも高く隆起した地塊」、または「谷と谷との間に挟まれた凸起部」とある。^①もう少し意味深そうな定義としては荻生徂徠の随筆『南留別志』に「山はやむ、川はかわるといふは理学者の説なり」というものがある。^②

そういう難しい語源説は別として「山」は日本人にとって何であらうか。

山上に神が存在するとの思想は、宗教思想が大変豊富である万葉集にまでさかのぼる。大伴家持の立山の賦「万葉集四〇〇〇」をみると、高い山のうえに存在するところの嶽の神なるイメージがでてくる。「天離る鄙に名懸かす越の中」等で始まる歌である。その中に「すめ神領き坐す新川のその立山に」という言葉が出てくる。人間社会にもっと親密で、季節によって山から降り、田の神になると言われる山の神は、啄木の歌に見られる。

目になれし 山にはあれど 秋来れば
神や住まむと かしこみて見る^③

続いて呪歌に目を向けると次の有名な歌がある。

昔ヨリ 卯月八日ハ 吉日ト
神サゲ蟲ノ 成敗ヲスル^④

この歌はかつて長い間、間違った語源説で解釈されていたから、神さげ虫とはいかなる虫なのか不思議で仕方なかった。

ところがこのことを正しい語源をもって切断してみると、つまり「神さげ」と「虫」を切り離してみると、山の神を迎えに行くという民間伝承上よく知られた習俗に結びついてくる。「神さげ」は神を山から連れ降りるとの事であり、虫を成敗するとは文字通りその連れ降りた神の力をもって虫を成敗してもらおうと云う事である。

他界であり、靈魂のすむところであると同時に現世と来世の堺でもある山は、大伯皇女が弟の天津皇子の亡骸を葬った際に歌った一首「萬一六五」によく現れている。

うつそみの 人なる我や 明日よりは

二上山を 弟と我が見む

万葉集の中には、山の他界觀念があまりにも沢山あるので、ここでいちいち話す必要もないであろう。

山が死霊の世界ではなく、「両界漫荼羅」のシンボルとして見られる事は、修驗道の山の特徴である。よく知られている事であるが、山伏の峰入は母の胎内に入る事に結びつけられ、擬死再生のシンボリズムを持つ儀礼である。ことに羽黒山の秋の峰ではそれが顕著である。

「峯中秘伝」⁽⁵⁾などの文献を見ると、その擬死再生のシンボリズムがよく現われてくる。峰入に先立って吉野川で水行が行われる。吉野川は上記の擬死再生の理念によって三津川となっている。そこで唱えられる秘歌は、死の理念と同時に、浄化と彼岸に達す事などを表わしている。たとえば

世ノ中ニ 五色ノ水ガ 流ズバ
無意ノココロヲ 何カソメケン

又は

トクトクト 申乗移レ 天小船
吉野ノ川ノ 瀬々ノ浪立ツ

浄化と世俗界との分かれば、次の和歌にも出てくる。

河上ハ イモセノチギリ 中タエテ
花カキ流ス 吉野川カナ

大峰の峰入の出発点は、柳宿という行場である。そこでは、修行者と不動明王が同一体になる事で、結局死んだ人間が不動の子として新しく受胎されるというシンボリズムが見られる。「峯中秘伝」では「不動ノ御腹ヨリ出テ亦其ノ不動ノ腹ニ入ルヲ入我我入」と云う。

「入我我入」は修驗道思想の中でも大変重大なものである。不動は大日如来の化身であるが、その大日如来の三密による不思議な動きが人間の中に入って、人間はそれと同一体になり、それによって一切諸仏の功德が人間の体に具足する事となる。つまり自分は大日法身の本体であり、人間の父母からの身はそのまま本覚を証得するのであり、ここには即身成仏と云う理念がはたらいっている。

修驗道の教典の中では、即身成仏はだいたい神秘的に、あるいは抽象的に書かれている。それでも平安時代の文献、たとえば今昔物

語を見ると、当時の即身成仏の理念は比較的具体的であったようである。⁶⁾

吉野山、つまり金峰山に入り、成仏の世界に入り、仏性の世界に入ると云う観念が次の秘歌に見出される。

吉野山 登リムカヘバ 法ノ道

柳ハミドリ 花ハクレナイ

中国の蘇軾や蘇東坡に出ている「柳はみどり花はくれない」は、仏教では自然の姿、諸法の実相と解釈される。極楽浄土である吉野山のシンボリズムは、いろいろの秘歌に表われてくる。

極楽ハ 聞テ来レバ 吉野山
皆ノ妙法ノ 蓮ナリケリ。

吉野山の中に金の鳥居と云う重要な行場がある。山伏はこの鳥居の柱に手をかけて、秘歌を唱えながら巡る。この鳥居は峯中秘伝ではいろいろな名称をもち、涅槃門とか、往生門とか、入我我入門、仏果円満門などと呼ばれている。これは大峰の峰入コースにある四ツの門の第一である。「四門」は天台や真言の教理の上で様々に解釈されているが、また葬祭習俗とも結びつけられている。⁷⁾

大峰修行の諸房を行場として、それによって仏性を証得する道に進むのであるが、それはまた同時に母胎内の生長のシンボリズムも

持っている。宿房に入ることは胎内へ立ち帰り、母の乳味に合うことである。次の歌がある。

父母ノ 乳味爰ニテ 吞ミ納メ
法ニ入テゾ 意知ラバヤ

又は

法ノ味ヲ 行納テ 其後ハ
無為ノ都ニ 入ゾウレシキ

「無為の都」、又は「阿字の故郷」に入るか帰るか、これはもちろん仏果を得て、仏の世界、極楽に入ると云う事である。

山に登る事、ことに儀礼としての山登りは根本的には清浄なことである。これは格別驚くにはあたらず、どの宗教にもみられる。山は聖地であるのみならず、修行をする者にとっては、一種の清め、浄化を授けてくれる場所でもある。芭蕉の次の俳句には、このアイディアがうかがえる。

涼しさや ほの三日月の 羽黒山⁸⁾

芭蕉ほどは有名ではないが、九州佐土原の山伏、野田泉光院は六

年に渡る回国の旅中で出羽三山に登った時、次の二首を詠んだ。^⑨

憂き業の 影恥かしや 月の山

四つの苦を 洗ふ湯殿や 霧 時雨

しかしながら、清浄のイメージが多少曖昧であって、むしろ全く反対のイメージをもって山を見ていることもある。つまり汚れ、禍等を山の方へ追い払い、山を不浄の世界とみることもある。

「呪詛重宝記」の呪歌を例にとれば、山と里の区別を背景として、不浄のイメージがはっきり出てくる。

はありとハ 山のくち木に すむ虫の

さとへいずれば おのがひがごと^⑩

山は、特に修験道では極楽とみられる事にはすでにふれたが、民間伝承の中の山には、なにか大変な宝物が隠されているとのイメージがある。諺や格言にはこの種の「豊饒さ」のアイディアもよく登場する。例えば「磯貧乏に山宝」と五島では伝えられる。^⑪

多少飛躍するかも知れないが、民謡の中には宝山のアイディアが随分沢山ある。例えば

合津磐梯山 宝の山よ^⑫

また呪歌にでてくる山は、大体において、非常に効果ある薬草や聖水がある所でもある。

さて、山の外見からくる雄大さ、非常に高いこと、険しいこと等は、色々なイメージの出発点になる。中国古典の『中論』には「学ぶ者は山に登るがごとし」^⑬との言葉があり、近世寺子屋では「父の恩は山より高く」と子供たちは学んだ。文学、特に和歌と浄瑠璃では、山の高さは感情表現に結びつけられている。「恋の山路」もあり、「氣の毒山」もあるが、珠に「思いの山」は詩歌によくでてくる。夫木和歌抄の中の藤原為家の一首を引用しよう。

あはれわが 思いの山を つきおかば

富士の高ねも 麓ならまし^⑭

同じく山の高い事を以って、及ばぬ恋を葛城の高嶺に例えている例が閑吟集「二五」にある。

葛城山に咲く花候よ あれをよと

よそに思ふた念ばかり

また、病氣の一番の危機を乗り越える事が「山をあげる」、「山があがる」等と表現されるのも、非常に高いことからの連想である。痲瘡の呪的治療として使われた疫瘡絵には、山をあげる歌が沢山出てくる。

軽々と よきもて遊ぶ いもがこは

山あげるさえ 足の早さよ⁽¹⁵⁾

奈良時代から、いわゆる私度僧は山を修行地として選んだが、平安時代の最澄や空海は、修行者にとって山での滞在は大変重要な事だとした。中世に入ると山は遁世の場となり、そこで静けさと観想が求められる事になる。西行の有名な歌二首を引用しよう。

あらし越す 峯の木の間に 分来つつ

谷の清水に やどる月影⁽¹⁶⁾

次の歌では雲、月、風を比喩的に用いて、煩惱が払われ、自性清浄の心が現れてくる事を詠んでいる。

月澄めば 谷にぞ雲は しずむる

嶺吹きはらふ 風にしかれて⁽¹⁷⁾

山寺を取り上げる歌にも、当然とは言え、遁世性が含まれている。梁塵秘抄「九八」では「寂寞音せぬ山寺」と歌っている。仏教や特に神仏習合思想を背景とする梁塵秘抄とは系統の違う閑吟集「二三」では、遁世の場である奥山と世俗の今世との区別がはっきり出ている例もある。

須磨や明石の小夜千鳥 恨み恨みて鳴くばかり

身がな身がな 一つ浮世に 一つ深山に

深山とは後に取り上げる奥山の類義語である。

山の不動性もまた注目される。その不動性は永遠性にも繋がってくる。山の峯に朝日がさすというイメージは、君の御代、つまり国は永遠に栄えると云う意味になる。万葉集にもその例はあり、また梁塵秘抄「五二八」には次の歌謡が記されている。

君が代は 限りもあらじ 三笠山

峰に朝日の ささむかぎりは

「仁者は山を楽しむ」という格言には、山の静寂、不動の姿があり、謡曲「淡路」の中にはそれをもっと明確に「風は吹けども山は動せず」と出てくる。⁽¹⁸⁾しかしながら、三条西実枝の一首をみると

動きなく 山とは言わじ 朝夕の

雲の立ち居の かわる姿は⁽¹⁹⁾

とも、詠まれている。

次に、山は人里から遥かに遠ざかっているという観念が出てくる。このイメージは、「奥山」、「山の奥」等の言葉にある。呪歌の場合、

奥山と云う言葉には何か呪的な力が秘められているようである。例えば夢違、悪い夢を良い夢に変質する時、奥山はよく歌の中に出てくる。悪夢をその奥山へ追い払うのか、あるいは夢違えが可能な場所が奥山であるのか？

病み目や虫歯治療関係の歌では、悪が追い払われる所が奥山とされる。また「峯は八つ、谷は九つ、山は三つ」等の唱えごとの場合にも同様の意味が含まれている。梁塵秘抄「四七〇」は、奥山の多少薄気味悪い、不安な、はっきりしない性格をよく表している。

おぼつかな 鳥だに鳴かぬ 奥山に

人こそ音すなれ あな尊 修行者の通るなりけり

但し民間伝承における信仰や儀礼の場合では、以上に記した奥山のイメージとは正反対のもの、つまりきわめてポジティブな場所としての奥山も出てくる。それは次の諺にも見られる。

学者と松茸は山の奥に出来る⁽²¹⁾

人里離れて隔絶した、遠い景物としての奥山は、次の古今集の歌「二二五」に見られる。

奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の
こえきく時ぞ 秋はかなしき

但しどんなに離れた山の奥にも風は吹くと言われる。この風は勿論無常である浮世の風をさしている。しかしここでもやはり逆の発想が見られない事もないのである。

浮世はなれて奥山住ま居

と始まる館山⁽²²⁾ぶしには、むしろ浮世から遠く離れた理想の場としてのイメージが強いようであるが、さらに読み進んで行くと、やはり多少曖昧な二重性の意味を帯びてくる。

恋も愀気も忘れていたが 鹿の鳴声聞けば

昔が恋しめてならぬ、あの山越えて逢うひにくる

万葉集の頃にはまだみられない「山里」の観念は、平安時代になると生涯の理想的な別荘地として歌われ、そこには恐らく中国の山居思想も働いていると思われる。

いずれにせよ、山の季節として最も感情的に歌われるのは秋であるが、仏教の和歌には秋の山と云うイメージがむしろ悪い意味付けを持つ場合がある。

形コソ色付ク秋の山ナラメ
心ハ冬ノ峯ノ常盤木⁽²³⁾

この歌は恐らく心と形、本質と外見の相違を取り上げているのであろう。神道、仏教、儒教とを基とする江戸中期に発祥した心学の教訓歌には、山里と浮世がたびたび登場する。

住みなれて 後もこゝろの かはらねば
猶山里も 憂世なりけり⁽²⁴⁾

このような道歌の意味を取り上げる諺には、例えば「山は浅し隠れ家は深し」⁽²⁵⁾等がある。

このほかにも、山を擬人化し、山には人間と同様な感情があるという表現もある。万葉集にもその例が見られる。もう一度、梁塵秘抄「五三三」を引用しよう。

大原や 小塩の山も 今日こそは
神代のことも 思ひ知るらめ

さらにもう一つの興味深い問題が残っている。それは山に対する様々な観念の中で、一体どのようなものが最も根強いのかという問題である。山には死霊も住むし、鬼もいるし、また例えば栄華物語には「恐ろしき山には」との表現もある。そこにはほんとうに「山」に対する恐怖感が存在しているのであろうか？ それとも「山」に対する親しみが、日本人の心性として最も強くあるのであろうか？ それらの親しさ、懐かしさは、故郷と云う大事な観念と

結びついてくる。例えば石川啄木の浪民の歌はそれをもっともよく表現している。

ふるさとの 山に向ひて 言うことなし
ふるさとの山は ありがたきかな⁽²⁷⁾

あまりに多量なイメージの中から、ほんの一部だけを取り上げるに終ってしまった。万葉時代から近世、近代、現代までの莫大な資料を検討し、山のイメージの何らかの歴史的発展、成り行きを辿ろうという一種の誘惑に答えることができなかったのが残念である。

〔註〕

- (1) 新村出編、広辞苑第四版二五八四頁。
- (2) 日本随筆大成、第二期第八卷一八頁「昭和三年」。
- (3) 一握の砂「石川正雄編、啄木のうた、現代教養文庫三〇七、二七二頁、昭和三十七年」。
- (4) 修験深秘行法符咒集八、二九八「日本大蔵経修験道章疏二、大正八年」。
- (5) 修験峯中秘伝、日本大蔵経修験道章疏1。
- (6) 「弘法大師」大日ノ定印ヲ結テ観念スルニ顔色金ノ属ニシテ自ヨリ黄金ノ光ヲ放ツ「今昔物語集」卷十一第九、七七頁（日本古典文学大系）。
- (7) 五来重著、山の宗教、修験道、一五八頁、淡交社、昭和四五年
- (8) 岩田九郎著、芭蕉俳句大成、六三三頁、明治書院、平成三年。
- (9) 日本九峯修行日記、文化一三二七一一二。

- (10) 咒詛重宝記、元禄一二、二二〇。
- (11) 故事俗信ことわざ大辞典（小学館昭和五七）、八〇頁。
- (12) 小寺融吉著、郷土民謡舞踊辞典「名著刊行会、昭和四九」、三頁。
- (13) 故事俗信ことわざ大辞典、一〇七一頁。
- (14) 夫木和歌抄、第二〇雑部、八〇九六。
- (15) 拙著、痾瘡神江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究（岩波書店平成七年）参照。
- (16) 山家集九四六「日本古典文学大系」。
- (17) 同右一一〇六、山田昭全著、西行の和歌と仏教、六二頁「明治書院、昭和六二」にも参照。
- (18) 故事俗信ことわざ大辞典、六〇五頁。
- (19) 佐成謙太郎著、謡曲大観、第一卷、一五二頁、明治書院、平成二。
- (20) 大歳時記四、句歌花実、四一六頁（集英社一九八九）参照。
- (21) 故事俗信ことわざ大辞典、二四七頁。
- (22) 前掲、小寺融吉著、三〇〇頁。
- (23) 修験頓覚速證集卷下、四五二頁、日本大蔵経、修験道章疏Ⅱ。
- (24) 絵入心学道歌百首和解（守本恵観編輯）明治一九、京都。
- (25) 故事俗信ことわざ大辞典、一一六六頁。
- (26) 栄華物語、上二二八頁。
- (27) 前掲、注（三）、四八頁。